変わる日本の「暮らし」と「まち」 30

復旧・復興のさらに一歩先へ

宮城・気仙沼市震災復興事業

（2012年◆平成24年から実施中）

新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

世界三大漁場に数えられる三陸沖。そこで活動する漁船の寄港地として、さらには水揚げされた魚介類の加工、漁船の造船などを含めた一大水産基地として、気仙沼は古くから栄えてきた。湾の入口には、東北最大の離島・大島がある。その存在は湾内を穏やかな良港にするだけでなく、風光明媚な景観で観光客を呼んでいる。

2011年3月11日、気仙沼も壊滅的打撃を受けた。気仙沼湾の最奥部に位置する鹿折（しおり）地区は、津波と火災に襲われた。大型漁船が打ち上げられた映像を記憶されている方も多いだろう。手前の南気仙沼地区は津波と地盤沈下で全域が浸水、甚大な被害を受けた。

◆地権者と事業者をむすぶ

気仙沼中心部は平地部と山が隣接していない。そのため、他の被災地のように山を削って高台の住宅地をつくり、その土で平地の嵩上げをする形ではなく、元の居住地をそのまま使う。海に近い商工業地は1・8メートル、奥の住宅地は約3・5メートル嵩上げし、その土は他の地域から運ぶ。

気仙沼中心部にある鹿折と南気仙沼の2つの地区の区画整理事業を担うことになったURは、まず地権者に自分の土地をどうしたいかというリサーチから始めた。

「土地を持っていても、すでに他の場所で生活を再建している人もいます。その人たちが戻ってこない可能性もあるからです」

UR気仙沼復興支援事務所の日野智之はそう言う。結果、両地区で自力再建を希望する住民は70パーセントだった。裏を返せば、ここに戻らないと考える住民が3割もいたのだ。日野は続ける。

「まちづくりのコンセプトを『人が戻ってくるまち』としたのですが、このまま区画整理に入ってしまうと、3割の空き地が点在することになって、復興がスムーズに進まないと考えました」

別の調査で、気仙沼への進出を希望する事業者が、かなりの数にのぼることがわかっていた。

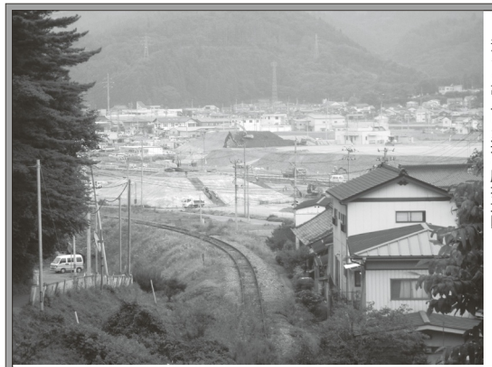
「戻ってこない住民の土地を集めて大きくすれば、事業者の誘致が進み、それがこの地区に人が戻ることにつながると考えたのです」

URは、自らが土地活用を希望する地権者と事業者との「仲人役」になり、マッチングを行う仕組みを考案した。それが「鹿折・南気仙沼地区復興まちづくり事業者エントリー制度」だ。さらに、区画整理を進める前にマッチングを行うことで、土地の集約化による有効活用と復興の迅速化に寄与することになる。

「個人が事業者と交渉するのは難しいものです。しかし、URさんが間に立ってくれることで、大規模な土地活用ができる。URさんから提案されたこの仕組みは、非常にいい制度だと思いました」

気仙沼市建設部都市計画課の村上博課長は、復興事業では初の試みとなったこの仕組みを高く評価する。この8月には地権者と事業者の「お見合い」が始まる。業種はスーパー、ドラッグストア、ガソリンスタンドなど多岐にわたるが、さらに多くの事業者を集めようと、URは個別の営業も考えていると日野は言う。

「気仙沼発の仕組みが広く伝わるようにお手伝いしたいのです」



着々と嵩上げが進む鹿折地区。

◆復興を「攻め」の姿勢で

「津波は想定していました」

気仙沼鹿折加工協同組合の川村賢壽氏はそう語る。自社の冷蔵庫を高い位置に設置していたのもそのためだ。だが津波は想定を超え、設備は流された。半年後、川村氏の会社は再建を果たす。だが、将来も生き残れるか疑問が湧いた。

「漁師は仲間が不漁でも、自分だけ大漁だったら儲かる。つまり水産業は一匹狼の集団です。まとまるような体質ではありません」

それでも川村氏は、一匹狼たちを説き伏せて組合を設立する。もちろん、生き残るためだ。

「組合には二つのメリットがあります。一つはコストダウン。冷蔵庫や海水設備を個別に再建するのは厳しい。組合で共同利用する形にすれば負担が軽減されます。もう一つは販売戦略です。組合の統一ブランドをつくることで、大手商社さんの販路を利用させてもらえる。それを訴えました」

賛同した19社の一匹狼は、力を合わせて再建へと突き進む。来年には、組合員ごとのブースが用意された「プレゼンルーム」が完成する。バイヤーは、そこに行けば19社と一気に交渉ができる。川村氏は「こんな施設があるのはウチだけ。バイヤーさんにも喜ばれると思いますよ」と相好を崩す。

さらに、生き残るには鹿折の活性化も不可欠だと力説する。

「震災前、鹿折は衰退しつつあるまちでした。いくら産業を立て直しても、買ってくれる人がいなければ無意味です。お客さんがいれば、加工品の直売所を併設することもできます。だからこそ集客施設が必要なのです。鹿折が新たなまちに変化するため、URさんに相談しました」

川村氏は、ホテルを誘致することを決断し、エントリー制度に申込んだ。立地は嵩上げした所に決め、気仙沼湾と新たに建設される本土と大島を結ぶ橋を一望できる。気仙沼が有名な「フカヒレ」を当て込んで、サメが泳ぐ水槽を設置するプランもあたためている。

「URさんのスピード感は素晴らしい。多様な業種とのパイプを構築する力にも助けられています」

URが手がける気仙沼の区画整理事業は、2017年度には完了する。菅原茂市長が「復旧、復興にとどまらず、創造的復興を目指しています」と語るように、気仙沼は被災から立ち直るだけでなく、さらに拡大しようと攻めの姿勢を見せる。それは、マッチングによる土地の有効活用や、地元加工業者の集客戦略に表れている。

「震災ですべてを失った気仙沼は守るものがなくなりました。もう攻めるしかありません。今こそ生まれ変わるチャンスなのです」（川村氏）

気仙沼の力強い復興は、もう間もなく目に見えることだろう。

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社